宇津保物語

初編　上ノ一

安陽

特別
へ13
3474
5

女湯之巻自序

頃日著す男湯の浮世風呂一篇。這は大ゐに發客腹をは温されど。湯番のあくびは火と共に焚落の灰となりしを。○終湯の人慎ひ今一篇

特
門 13
號 3474
巻 5

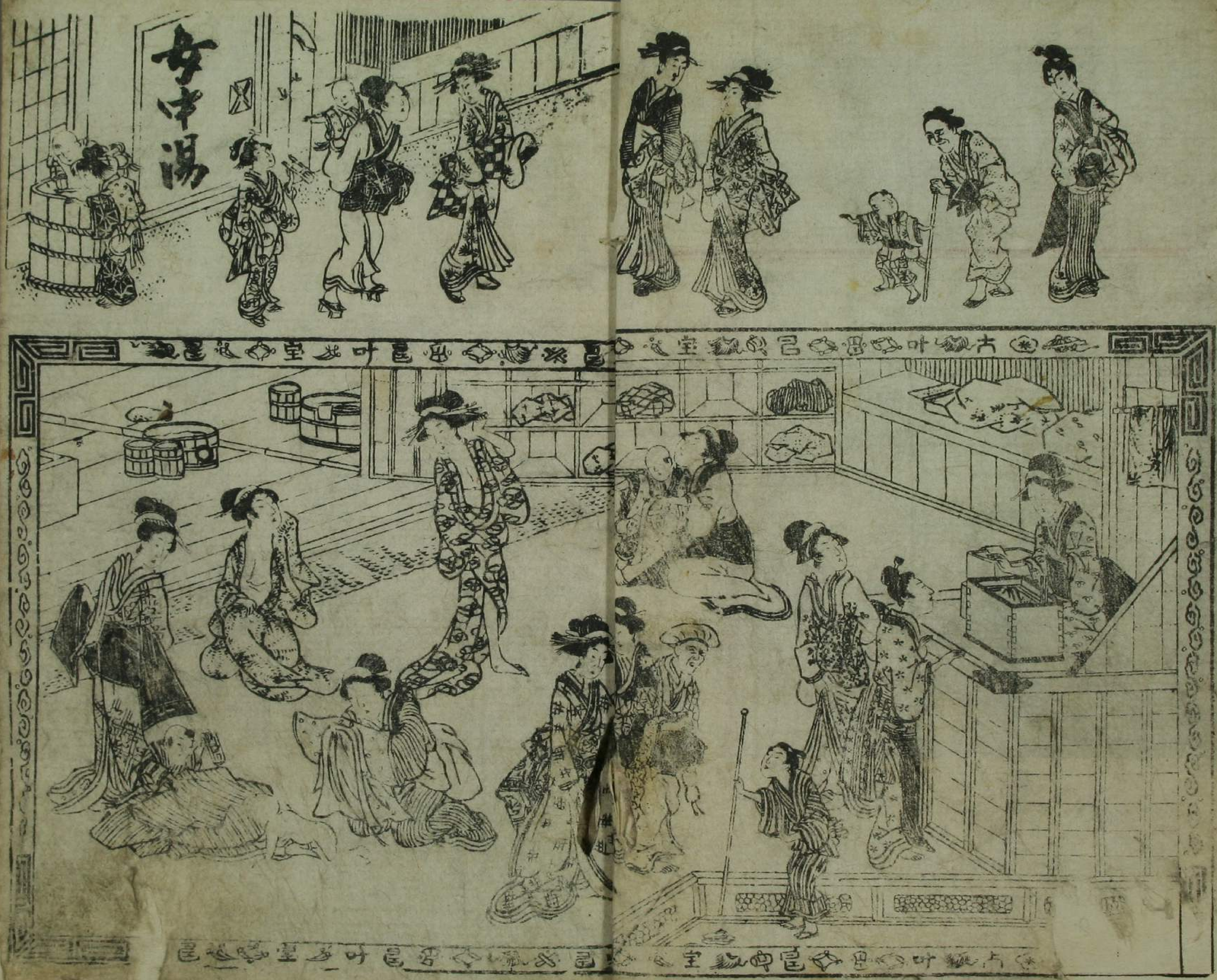
昭和二七年
六月二十日
購求

噫嘻惜哉。其焼版ハ東も角も[illegible]なきぬ間ニ今一編と。二度入の古方ねより。保の羽豆を俟ずして趣室頓之。湯汲の柄杓。作者が毫まぶろくと埓あかずハ。六日の菖蒲湯通客よ

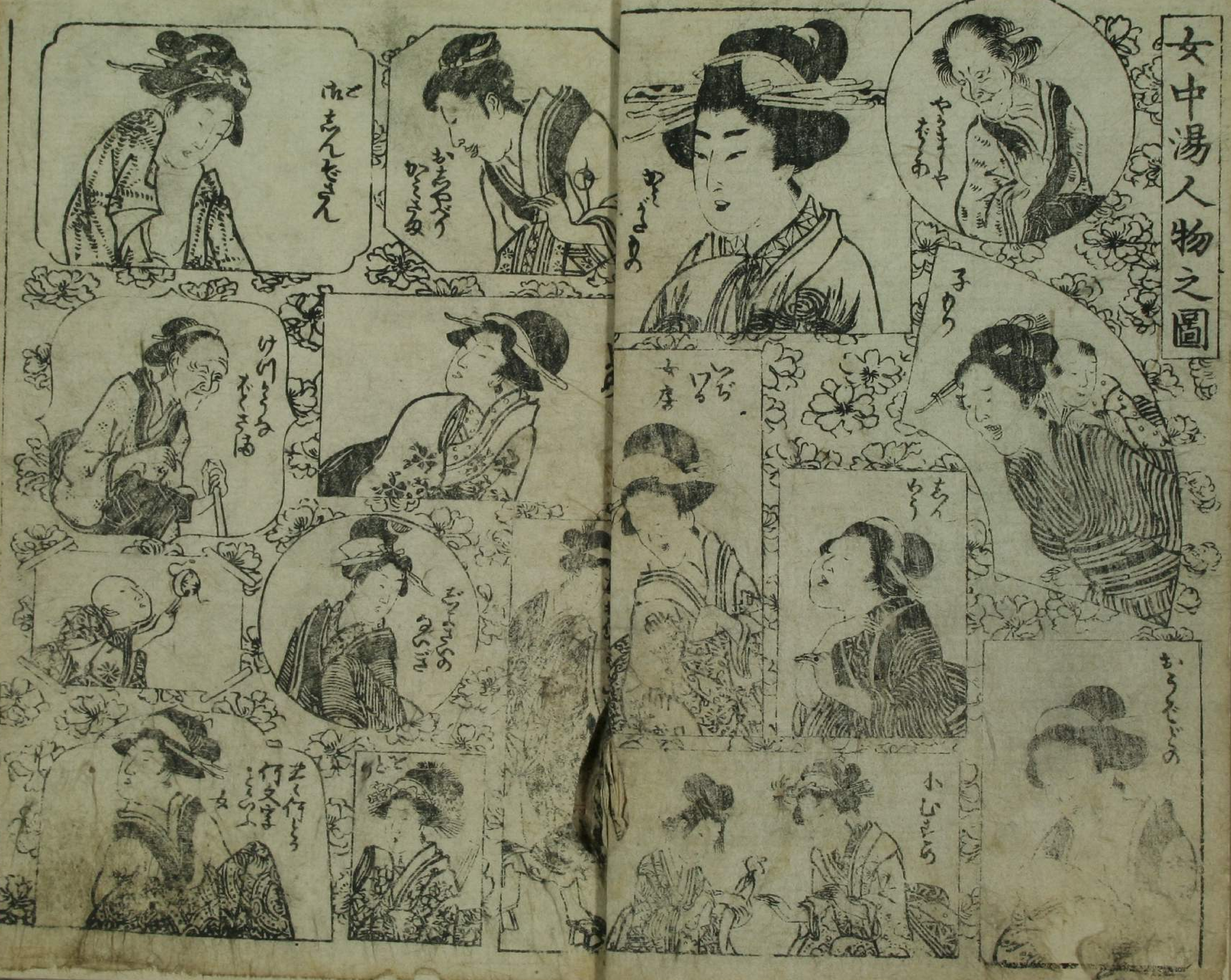
後逃。残暑の枇湯續篇なかるべし。未あがらぬの、ゆのらぬうと。草稿を急ぐるり長湯の迎に彷彿ならねど小さな智嚢を糠袋はつと絞るも。久しい物日の十二銅。ちよいと撿と錻

おかし。勿論(もちろん)覗(のぞい)て看(み)もならぬ女湯(をんなゆ)別世界(べつせかい)。これに神(かみ)でもあらうと。泥(どろ)湯の樋(とひ)の当箇棒(あてがつぱう)が。竟(つひ)に二冊(ふさつ)の草紙(さうし)となりぬ。此節(このせつ)薪(まき)高直(かうぢき)に付(つき)。前篇(ぜんぺん)の余材(よざい)を輯(あつめ)て二番(にばん)仕込(じこみ)の女湯(をんなゆ)を沸(わか)せば。烏(からす)の行水(ぎやうずい)の早拵(はやごしらへ)。ざつとなぐりて云爾(しかいふ)。

文化六年巳乃重陽(ちやうやう)前後(ぜんご)五日(いつか)の
急案(きうあん)　江戸前(えどまへ)於市隠(しいん)
式亭三馬題


女中湯

女中湯人物之圖


やかましやばゞあ
子もり
いぢわる女房
おしやべりかゝえ女
小むすめ

附言

小児を養ふに丸薬の苦きと水飴の甘きとあり。されバしく[illegible]ふ譬へバ二史五経ハ丸薬の苦味にて。稗官野史ハ水飴の甘味なり。蓋世に女教の書許多あれど。女大学女今川乃たぐひ。丸薬を喰ふに苦けれバ婦女子も之に味ふこと鮮し。這女湯の小説ハ素より漫戯の書といへども之の紙用ゐて読む則ハ水飴の味ひ易く善悪邪正の行状ハおのづからに暁得べし。されバ常言にいふ[illegible]らんとく吾ふりを好歹まれ改めて教諭の捷径となるべし。又強異見ハ耳に止めぬ壮者も含笑ある教訓ハ聴くれ倭ぶりのものなれバ。自然と心にとむるものなり。人々假初の戯冊子も心をとめて味ひなバ。大益必らずとも小益乃中にあるべし　云尓

此書初編ハ文化己巳の年に肇[illegible]祝融氏の怒りに罹りて板面ことぐく烏有となりぬ。仍りて再び増補して上梓せんとて紙をならり　四方主顧の君子叢市の白城價て需めたまハバ叢客乃幸甚ならんと欽白

人相酔狂集

俗名 百ばら

これハ百ばかりとかぞへて男女老少さまぐ〳〵のにんさうをかしみづき其相の心から出るあやうき詞をとくにされバひやうひやくのおもしろさハどうもこうおもはれるを本之

劇場看的客者評判記

二種共 三馬作

○草稿すでに出来仕る彫刻とりいそぎ近日賣出し申候

役者ひやうばんきのひつかへしにてがくやの方から見物の人々を評しる古今未曾有の人物評林おしなべての人の善悪男女ともきゝなれしひやうばんきのふつきやう仕らちのこうさん五ツのへんかつ切者よりひいきひいきのてんがう乃んた郎それぐ〳〵の意味とさぐりくく例乃とりまぜあるよ

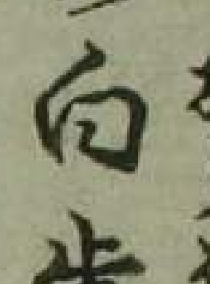
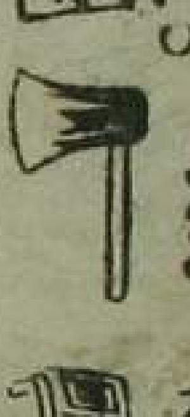
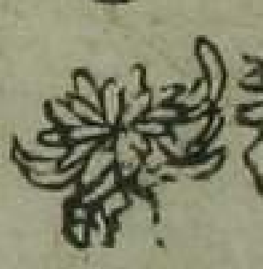
諢話浮世風呂二編巻之上

江戸戯作者 式亭三馬 著

女中湯之巻

朝湯より昼前のありさま

物あらひの百さへづり「一切成就祓極且穢毛滞無礼波穢者有羅之内外乃玉垣清浄登申尋「一天四海皆帰妙法南無高祖日蓮大菩薩南無妙法蓮華経〳〵「願くハ此功徳を以て普く一切乃衆生に及さん南無阿弥陀仏〳〵南無阿弥陀佛。浄土宗なら。法華なら。八宗九

ろのはどふだ　女湯の障子を明て。そさむいと云ひながら庭へぶらくらしてへ来るは。何文字とやら某何とやら名の有る十八九の白歯。といふ着模様。謎染の新形浴衣をかへて。「ヲヤお鯛さんお早うござへますね。夕ァ嘸おやかましうらう　しまきの料理屋の娘おとい「アイゆよべハお袮むろくさら子。いろでもあの生酔さんハ夜が更ける程「アイサそれでも癖が有て能上戸さ。粕兵衛さんのそれ酒乱でおいらう餘よ。あれうら子。ぞろ〳〵と送て来る途。新道のまゑの角で一所になつて河岸アしく。

そろ〳〵内の前まで送てき。「いく気毒さんね。あの人ハ世話焼母沢爺どの子。呑助さんのへぶ不番と。飲六さんの悪ふざけがおそれる程へ「ほつさ酒香さんの甚九も騒ぐしいよ子エ「いつでもさうさハ鼾さ。ヲヤ〳〵モウお仕舞が出来たさ子「アイ。今朝ハお掃さんが一番に来て呉さうらサ。おまへさんのハ誰によお結へせさ「お筋さんさ「いつそ恰好がよい子エ「なアに今朝ハ髪ぶら〳〵。勝手が遠ておかアの宮ねさ「人が髪も上手でもするのめさ。あつち状向ておかんせ。ヲヤいつそよいが子エ「一ぶ

上方者ぢゃアあるまいが「隠「いゝへ孫でござります「ばゞ「ハイお、ゆるりと（ト孫ハ下駄を履して／うちへかへしてやれ）「老「ちっとおよんなさいましな。宿に母が居ますよ。パイさようならト（隠居ふたり／風呂へいる）

◢（あとより来る、色も白うて／仲よしと見えて二十あまりの）（向歯少しそのうへ小さいのがかさなって、そのうへささのとめ、あごもぶつぶくあかく、くるん／らんで丈つやうまそうなく。向歯も黄ばみよくあつらへれど、ひつじたちの眉毛がぶつ）（ざつくりで、額中の七難をかくすといふやつ。中形の下駄をがらがらとひけらかしく／すきとほそで、湯ぶんのえそさるまあいさうし。ゆかたを引かけ御しく、峯をときさあゆから風）（呂の方へむかひ、／えんあうさを通して）「あぞち「お三味さん。ト（いへども／ききぞ）お三味さァんつんぼう（め。あの中で／きれうの娘）「おばゝ「アイヨウ。お撥さんかお早いの「お撥「お早いぢゃア孫へ

いはざ。おめへといふものハ、きよまんな者さの。さうしね

仕合をしらねへが孫のつ。あれなど待て居てくれるからのふ。「隠「それでもおめへのお供ハ持かける孫へものを「婆「アイサ。大食ぢやから孫。左様さ。至極おまへさまのが頼むなの筋さ。ト（いひながら／風呂へ入る）いつまでの。おめへの噂よくいふの。おめへ二所のかゝさんがいふからへいづくぞ今行きませ。今しがたまでおめへの来るのを待て居たが、どうもあの子ハしよみんな孫へ。何の角のと嬉しがらせる奴さ。ホニ〳〵おめへのかゝさんせど者さの。いつそ世話が焼けるよ。おらが所のかゝさんと来たら小言ばアつかり云てうるさくってならねんぢゃア孫へ「隠「孫がな

その代りにとつさんが気が短いから（ぶち）「あんまり気が短ら」かゝる昨日一夜かゝさんに叱られてだろうし寿るのな。とうさんの贔屓をするじやアねへが。傍で歯痒い様だよ。コウ〳〵おめへ、ゆふべハ大酒屋が（さく）「アヽ」（注ニ曰アイといふ返答をてうかへんでか女の返事と言）おめへハ（ぶち）「マヽにハ蛭子講の座敷さ。丁度八ッに成たから（さく）「マヽもそちこち八ッごろさ。（ぶち）「むかう酒をのんだらう。是見な。ゆふべまでハ目が腫ぶつてよ（さく）「道理で色が悪い（ぶち）「ナニあつい（さく）「あついのが弱虫だつち。（ぶち）「弱虫じやア無へいかな。おめへもあつからうが。此子の[illegible]ちうハちの

ぼうなかう子ハ猿へよ。トいひ〳〵「ちつとうめておくれ」今うめるほどモウありません（ぶち）「今うめるもさきもまどい。ずうづわつかうめや。おいらハ三助ぶのう（湯屋）「三助といつちや（アヽ[illegible]）うめませんへ（ぶち）「そんなら三助大明神様おがみますよ。（此うちうめをうめる）（湯屋）「サアかきまはしのは（ぶち）「いやだよ。誰がかき廻して物ぐ。コウ〳〵あつくなる。あの来る所へ「アレサ。まんがちるな。コウ。お三味さん。おめへ一昨ハ何処へ行た（さく）「芝居へ（ぶち）「フウお客とか（さく）「ナアニ探りイ（ぶち）「ヲヤどれと（さく）「猫文字さんの所から誘ひにきたからの。あづ

さんと豊たけさんと一所によつてなさるが。おめへの所へ人を寄す
若通さんと堀の内へ参るといふから。むらさきずきん様へ
連が紀「紀の國やさ「むらぶらぶらよのう。業腹な。弟が
鞘り目も見ん損なつたよ「芝居がお好きなら九三へよつて。
三さんはそれを見て出かけたの。二階で見へとどこへくといふから。御向で見ん
ね大勢首を出して居なさるよ。声色の弥七さんとのし松
さんが詞をかけるけ。その外の連が居るが早くかけ出して来さ
で。まあついちやな。サアく出かけたくト 番頭もみんな出すとおりのその湯を

（後でおきさせなさう きやうがしみ来ろう）
「サア お撫さん背中を出しなせえ。ト コレ。
此人の名やおれが先へ来たものを「どつちでもいゝ。どうぞ一備よ
若い者ぞ。（此若い者の男へ来年から四五年も長年する由来。女中が二同じ詞づかひもいゝけ）
（ぞんざいが通つさうな）「コウ。叮寧に拔て呉な。いけぞんざいな。二三べん
さすれるかとおもつたよ。湯でぶつかけてお仕舞なさるのう「丈撫
で結ふとよ。垢ぞろでも毎日出る者でねへ「さうおいひなさんな。
お撫さん八の猫背中ときてゐるから。鼠の糞のやうな垢
がよれるよ「男 日で。去年もお留結口じやのう「男 中々喧嘩を

そつと置て。モウ／＼水の吹かけ鏡は悪いぞ。アヽうるさい娘どもだ。ソレよし。サア／＼お三味さん背中を出さつしやれ。「三味」ソレ出さつしやるさ洗わつせへ。ぞんざいな親父どのう。ト（ぶつ／＼のろ／＼）（ゑびすがほれば。りやく／＼）○（三十四五のかみさま。八ツばかりのむすめを乳のみざかりの子をだきて。門トはいりながら）「ヲヽ。あぶないぞ。あぶないぞ。ヤレ／＼あぶなかつたのう坊や。ヤレ／＼。内へ這入つたら温まるさぞ。ト（ふりむき）おかみさん此方へ「（湯やのかみさんかうとかみさんへ）「ハイお早うございます。一夜日はけしからねへお寒さでございます。お枝さんお姉の子。すぼく／＼。いつも御きげん能ぞ。お時さん

けふはお手習はお休か（娘）「イヽエ（かみさま）「ハア。おるのまけさね「ハ残じやりますが。私の目つまでものんでは休をたがりますぞ今日もちやんとお爺さんをだまかして。お休を致しますさ。兎角おとゝさま殿がおあまやかしるそあまりお次ぞ。それだから私のいゝえさうぞりお取上なしさ（かみさま）「おるさそのもづさおまへさん。ニタガ。かわいさ物で女腹のお子は兎角爺親の可愛がるものさ。アハヽヽ。お枝さん。何をお持だね。お薩かへ。其物をお持ぐぞ。ヲホヽヽ。いつも豊盤りだ。さんざ人相よしで其お子だ。ヤレ／＼

ひとりでお笑でさ。ヲヽ。ヲヽ。お杉さんかよ。ヲヽいゝお子だぞ〳〵。

母「サア〳〵お玉、衣をお脱るなら爰へおよこし。ソレお鞐でないよ。お杉坊も緜の足袋を脱で。ソリヤ。お胴着も解てヲヤ〳〵。アんがいにぢもねへ結びやうをしさ。お襦袢の紐が解る物だア。緩く。サア〳〵。ソリヤよし。サアいゝ。早くお湯で温よなりませう。アよい〳〵。よい〳〵。

●八才ばかりの女の子ザクロの障子を明て

馬「おつかさん〳〵。トよぶ

風呂の内より

辰「ろんざお馬か。何しに来さ

馬「あの稚あのう。おとつさんがね。お客があるから。あのう。早くおあがりと。[illegible]〳〵して。あのさ。何処へも道よりをせずとよ。だつてさ今お帰りと

辰「いく〳〵。今帰るまでを。誰が来さのうち。まくの湯へ来ても真直にお迎ひざらるせへのぞ。そしておのれお手習よれ〳〵[illegible]。何でお帰りだ

馬「けふはお休。あのウ。お清書だから。清書双紙を取りに

辰「そんならよし。早く行てお習ひ

馬「アイ。[illegible]。あのウ。おとつさんが子。あのウ。[illegible]へいは寝坊だよ。お弁当おくれ。お茶りと

辰「まあ久しいものさ。雨の降ねへ日は。お弁当はいりません

馬「ウヽ。それでも。ト（なきをなふに）ヨウ。おつかアさんや。お弁当あして

おまへなア。ヨウ。おまへさんざア。おとつさんが。お弁当もしてやれと
お云ひだ物せ　辰「チヨツやかましい。そんならお弁当もしてやるから。
お菜好はならないよ　馬「アイト　[illegible]　己「どうでもお弁当
でおまへの物ぞよ　辰「ハイサ。もううるさくてなりませんけれど
でも、お弁当が遅いと宿すべえよ疾参りますとかぱさうしく
えつさえつさらお師匠さんへおりてえずまん　己「いへ。又
画像風なふへ狩んでる何角彼なで、お弁当も能ござりません。
が、お菜があるんだか角だかと覗を好がるさうでございますよ。

ヤレ水入へ挿さうと花を買て呉ろの肉桂が何しの丁子
水まさるから。丁子も欲いのとざるぐの貼るなであるせい
仕果まさ　辰「いへさ何処のもその通りで二季まります。今紙の
料紙だのと盃も入れねえよ切りまぜて差し捨ます。
夫はまあアノ。贅り綺とやかして、子。あつちへこつちへひつくり
かへつて役者の早がはりの様がござりますそれ。夫さ、おまへさん
買行なく。ぱ私も一ツたのい、値はきつと私も行がおすゝめしまする
な。三ぜん目の兄どのは又。合巻とやら草双紙が出るとび。

買（かひ）ますが。葛籠（つゞら）に志ろう溜（たま）りましさ。ヤレ豊國（とよくに）が絵（ゑ）の。國貞（くにさだ）が絵のと画工（ゑかき）の名（な）まで覚（おぼ）えまして。それゆゑ今（いま）の子（こ）どもは功者（こうしや）な事（こと）でございますよ「巳」「さやうさねへ。私どもの幼少（ようせう）な時分（じぶん）は。鼠（ねづみ）の嫁入（よめいり）や。むし咄（ばなし）の赤本（あかほん）が此上（このうへ）なしでございました。「辰」「いへさ。何（なん）でも移（うつ）りかはる物（もの）でございますよ。鬢挿（びんさし）を入（いれ）なさるかへ。近比（ちかごろ）のおふは存（ぞん）じますまい。その頃（ころ）は一面（いちめん）に「巳」「アイサ。そんな摘髱（つまみたぼ）でございました。それがおまへさん。髱挿（たぼさし）が流行（はや）つて其上（そのうへ）調法（てうはう）な事になりました。獨（ひとり）でに髪（かみ）が結（い）はれます。あの嶋田（しまだ）くづしの形（かたち）などは役者（やくしや）の鬘（かづら）同然（どうぜん）さ。頭（つむり）へ冠（かぶ）せるえ。それが手（て）つかずに髷（まげ）が出来（でき）る。イヤハヤ利口（りこう）なものさね「辰」「一頃（ひところ）は頭（つむり）の上（うへ）へ髷（まげ）がおつかぶさつて居（ゐ）ましたが。又むかしへ皈（かへ）ッて此節（このせつ）は下（おろ）して来ますなどの島田（しまだ）になりましたさ。其上（そのうへ）に上方風（かみがたふう）を好（すき）このむものも出（で）来ます（なの）年（とし）さ。ホンニく擬（まね）る事（ざ）はおめでございますよねへ「巳」「左様（さやう）さ。京形（きやうがた）だの京（きやう）かんざしだのと。何でも珍（めづ）らしいものを好（すき）ますが。お江戸の人はお江戸の風（ふう）がいつちでも能（よ）うございますよ。つかねへ事でございますが。御出（ので）[illegible]のお姉（あね）さん

ヘタミカハ。お片付なさいましたッけね　艮「ハイ〳〵お気毒な事がござりましてから片づけましたへ　巳「おや。お一人ッても。お身の定まるがお結構めでたい　艮「何でござりまするかモウ女の子は今ッ食ひぶそくやー　器量でも小ざッぱりとしてをりますると　巳「先さまはお姑御がござりますか　艮「ハイ〳〵若い姑でござりますると　巳「それはあのお子さんもお骨が折れませう　艮「いへからぞんど。気立のよい姑御でござりますし。夫に聟どのは一遍どうらくをして堅まッた人だけに。至極なりて居ますから。大きに仕合さ。夫婦中も至極ようござりますと　巳「それは何より結構さね。よしや姑御がむづかしくても。御夫婦中さへよけりや鎌ひますと　艮「ハイサ。宜う路月帯を致しまするので　巳「ヲヤ〳〵それは重ね〳〵お悦びでござりますね。能くお毒だてをお気付なさいましよ。五月るまでは何ともなうても。あとの月は致さねばなれど。鯖などは悪し〳〵お何ぞなされますならお乳に障りがありますよ。実母散や婦王湯散も。おまへさんがお子からつゞけに御如在はござりますまいけれど　艮「ハイ私共も合ひ薬でござりますが。てりふり町の足袋やで売る

血の道の薬が能うござんすへ。看板も出しハ致しませんが、能く人の知つてるお薬さ。逆上るのでも至極よいおくすりでございますよ。あのお薬のお蔭で大分よい人がござりますから。方々へ教へて上ますと「巳「七夜の内に付けましたが。乳も出る。りもテよく知られて乳口の明くお薬がござりましたつけ。アヽどう忘れを致しました。何処でか有るぞ「辰「ヘエそれハ尾張町の平松の黒ぐすりでございませう。あれハよいお薬さ。熊の護符ぢやア。子安のお守ぢやア。お雛形ぐめとハされもく有がたい印を方々から借ますハさ。私がたびく産を致しても。子の産ハ何にも案じられませぬ。気味のわるいもので、ございますよ「巳「その筈さおまへさん。お若いなりさうさ。産婦を徳利に一盃なりまして。胎衣と御一緒にお埋なさるの道。幼子がお乳にお困りなさらぬといふお呪咀でございますよ。私どもハ兎角に子育がなくてあやまりますよ。おかニ、お羨しいのるのさ「辰「夫でも御亭主がお獨ぢやアッし、それが沢山でござへますとツ。跡に男のお子でござります。私どもハ女の子が三人男の子

二人でござりますが。そのうちでも女の子は。なんぼよく生れつかうと死ますぞ厄介さ巳「いゝへ。女の子が幼少まで能うござりますが。おまへさんのもお二人男のお子だらう。二ばん目のお兄イさんは丁度能いお跡とりさ。私どもの惣領どのも。世話ばつかりやかせて二年まり切りました。けれども晴にも一人の男だけに。あまやかして放蕩にも出しませんが。今での後悔さ。利口発明でも人中を見ねへぢやア役に立ませぬ。設るのはたやすくねへで。勤にこそやり功者になりますを辰「なふさ。どうで一盛りさ

お極らくでござりますとのさ。私どもの二番目も人中が薬でござりやして。本店へ勤ましてさ巳「へヱ。よく長く御奉公なさいますねへ。いづれとサ他人の飯をくはねば子。他の想像がござりませんのさ。それへサ奉公人を遣ふがとても子。我が身をつねつて見ねば他の痛さがしれましやせんはな。どうしてもモウ。親の手離れをしねへものは。痛さ痒さがわかりません御気毒お御奉公させやなさいまし辰「ハイサ。只今の分ではよく辛抱致しまして宿でほびしのぢやふ子。宿下りの外は内へ来るやうに

ヤ附[つけ]ましたら。近所[きんじよ]までお使[つかひ]に来[き]て内[うち]へはお寄[より]なさいませんに（おりすのあいさつ 下女うけきる）〽下女 おくさんエ。式手屋[しきてや]の馬[うま]さんが入[い]らつしやりましたら一寸[ちよつと]お逢[あひ]なさいまし 〽長 ヲイ。今行[ゆく]よ。おれは御馳走[ちそう]ほるる。二度[ど]三度[ど]のお迎[むかひ]ぢや。ホンニくさんまりと湯[ゆ]へも這入[はいり]ませんよ。ねへ。コレく喜代[きよ]や。おのしもの。お茶[ちや]の支度[したく]をさつせへよ。〽下女 ハイく ト出て行[ゆく] 〽長 さやうなら。お静[しづか]に 〽巳 ハイさやうなら。お宿[やど]へよろしくおつしやつて下さいまし。存[ぞん]ながら御無沙汰[ごぶさた] ト別れる（此ふたりのむすこさまねつとこわしなから てまへかおみをふかくむすびしこととぞなる）〽清 おかみさんおめでたふ 〽巳 ヲヤおかみさんお早[はや]かつたねへ。けふのやうに来[き]なさつた。ト（おかみのそばへ すわる）（おかみさん。けふのよおかみさんくのめでたいから おのづとこちらがおかみさんかれこれといふらしい）〽清 ホンニおかみさん。此頃[このごろ]はお遠[とほ]々しいの 〽巳 アイヨ。おめへめんだうがあるからさ。ドヤアねへから 〽清 ソレヨそのかはりよ。何[なに]宅[うち]の年寄[としより]が目[め]は悪[わる]し。足腰[あしこし]よふ自由[ぢゆう]なりの。かゝさるものじやアねへかな。嬉[うれ]しがるものゝ嫁取[よめどり]さ 〽清 何[なに]さ其[その]年[とし]じやアねへかね 〽清 いつそおもひなさる 〽巳 サレバ。おれよりは上[うへ]だらうよの 〽清 アヽ。上[うへ]より一[ひと]まはり違[ちが]ふ宅[うち]の丁度[ちやうど]じやな 〽巳 八十か 〽清 ナニサ。それのところをいふ

おぢさんぞ。七十よ「侍 おや。おや。おれハの去年まで五十七ぢゝけが。見えて六十ぶヨ。おまへさ来年ハ本卦がへりだらうといふらハさぞ「侍 此おぢさんハ高く薬を出すからかハ。ホヽヽくいつも若い元気ぞ「侍 いろくなくてさ。おぢさん四十九で信濃へ嫁入をしなれどの。六十ドで脈が上つたよのう。おぢさん。ハヽヽ「侍 おめへハいつも氣さくで能よ。白髪にハなつても氣ハ若いヨ「侍 氣紙腐しあつてもぜひねへるぶなんでもちつとハ貪慾しねへのさ。黒油でもつけて毛を一ぺんおしやらくをする氣ぢやのに嫁入口があらバおぢさん。仲人して呉なよ。鬼も六十番茶も出花ぶ。アツハヽハヽハヽヽ「侍 ハヽヽ。それよおめへハ後生がよからうヨ「侍 なアに後生も三娑婆もゆかふまゝ。死ぬ時ハ極楽よするがいゝ。此世のうちハあれねへものが。死ぬ先がどう知れるものか。寝酒の一盃ッヽも呑んで。快く寝るのが極楽よ「侍 それよ。おめへハ些でも酒がいけるぶ氣の持やうが違ふよ。おらちとらハ氣の晴やうがねへ。年が年百くよくよして居るぶ。ホヽヽヽ。これもくでねへ

ア完らく〳〵爺婆よ倦ド果さ「ヨヤ〳〵此お念仏さん ねや

ま今ッかく爺婆よ倦てつまらめんか。死ぬ先ふハ歯も抜変る

かくハお近づきの爺婆よ百までも壽をまもるが能かた「ヨ

ねやおみなりのみモウし。ちぐいがぐ。此二とも早くお如来さ参の

お迎をまつのさ「ヨ。何のそうらいらのねへ死よいくといか

人の。死よぶつさ倒れねへ。お迎が来ぬ。完らろと待とく

呉といふべんべい。地三でもんのまさ「死で見よさんさ生

たがるぶら。進出しさ嫁を鍵て後の嫁を悪いへ言な